
群青 作・松尾大生 札幌市民芸術祭大賞受賞作品

北海道 札幌市 経営コンサルタント 松尾大生 札幌市 北海道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

群青 作・松尾大生 札幌市民芸術祭大賞受賞作品

【Nコード】

N6719Q

【作者名】

北海道 札幌市 経営コンサルタント 松尾大生 札幌市 北海道

【あらすじ】

断酒会の男たちの物語。平成10年に数万の舞台芸術や交響楽、絵画などを抑えて1位になった作品。商業誌に掲載済みだが、まあ、時効でしょう。子供がよんでも残念な結果になるから、子供はエンターテイメントよんでね。意味不明だから。子どもは読まないでね。修辭的にケイタイ小説向けに編集しなおした点と会話文の前後で意図的に主語と述語を曖昧にしている点などご理解ください。

胸は常に痛む

冬が終わるとしていた。

小きざみに震えながら雪片を払い落とす街路樹から、風が強いことに気づかされる。

雪片は灯りはじめた街灯のもと、薄黒く濁った路傍の残雪にとけこみ、走り過ぎていくタクシーの泥水に掻き乱されて消えた。

山際からの残光が、白い看板をかしかにぎらつかせている。看板は前方のガラス窓にいびつにゆがんで映っている。

『内科・神経科・精神科』

という文字が裏がえり、読めるか読めないかの濃度で眼前をかすめる。

窓ガラスに光が灯り文字は消えた。歩調を強める。玄関の軒先からしたたり落ちた水滴が頭皮にしみた。スリッパに履き替え、薄暗い廊下を歩いていく。

『断酒会室』

とあるドアを開ける。蛍光灯の明かりが目にもぶしい。すでに集まっている会員が口々に、

「ようー!」

と手をあげた。

「おお！」

とこたえ席につく。

長テーブルを四角く囲み、二十人ほどが集まっている。

「それでは次に」

司会者が全員を見わたし、

「関根さんどうぞ」

六十すぎの白髪頭が立ちあがる。みな腰かけたまま話すのにこの男はいつも立ちあがる。そして声が大きい。

遠くを見据えるようにすばめた両眼。白髪の後ろを輪ゴムでむすび、顎ひげを常にいじくっている。

長身の割にずんぐりとして見えるのはひどい猫背であることと、脂肪とも筋肉ともつかぬ肉が必要以上にまとわりついているためだ。

『関根商会』

とネームの刺繍された作業服の裾がすり切れているのに気にするようすもない。

印象的なのは、ある種聡明な大きな瞳とは不釣合な団子鼻。ひげで隠れた口もとは笑うと前歯が折れている。

インチキな仙人。

仲間内ではそんな風に呼ぶ者もいる。この男ほどみなから尊敬され

同時に侮蔑されている会員は他にはいなかった。

「もう何度もお話しした内容です。今日は新入会の方々がおられますので再び――」

缶コーヒーを一気に飲み込む。脂ぎった喉仏が上下に動いている。

みな、うんざりとした表情で男から視線を遠ざけた。

ある者は机をトントン叩きながら組んでいた足を入れかえる。露骨に「けっ」と吐き捨て壁に向かって「またアリガタイお話しでございまちゅう!」とふざけて叫ぶ者もいた。

関根は続ける。

「断酒会といっても怖がることはありません。みんな一度はどん底に落ち、立ち直りつつある人達です。あえて立ち直った、といいきれないのが悲しいところですが」

と髭を撫でる。

幾人かが笑った。

「あれからもう十年にもなります。その夜、酒に酔ってジープにひかれました。

当時の私はズボンを穿くのも忘れ、下半身まるだしで片手にウイスキーのボトルをぶら下げて街をうろつくほど、病んでいたんです。

気がつくとな様々な機具を取り付けられた自分がベッドに寝ているのが見えます。

看護婦の仕事ぶりに、『こら、あんまり乱暴に扱っんでねえ』

と憤慨したのをよう覚えております。ロボットかミイラみたいにベツドに縛りつけられた自分がいる一方で、とてつもなく身軽で気持ちのいい自分がいる。

横を向くと『北海道大学医学部卒業記念』と金文字の入った柱時計のガラスの中まで見えました。

ネジ巻きが掛け金からはずれ、振り子の下に落ちていました。後で確認したら、やっぱり見えたままでした。夢だ幻だと非難中傷する方も多々おられますが……、なあマチオ。おめえだよ」

男の視線が自分に注がれていることに気づいて我に帰った。上の空だったのである。

関根はひとしきり私を睨みつけてから、

「このように精神安定剤なしでは夜も昼も明けぬ青年が一方ではおります。」

呂律がまわらねえほど惚けた頭でなくっては、仕事もなんも手につかない。それでも酒は断てている。アル中の根底に神経症が存在していたことを、自分を知るための内観療法によって自力で気づいた。そんなマチオは本当にえらい！」

拳で机を叩いた。缶コーヒーがぐらついて止まった。話し続ける。

「場面は変わり極彩色の光が交錯する全体に青っぱくて薄暗い空間を漂っております。」

両手をだらりと前方に投げ出し、斜めにのめって、お化けのような格好で空中に流れておりました。自分つてもんが少しずつ剥がれ落ちていつてエ……、

『こつやっておいらも死んでいくんだかなア』

そんなふうを考えておりました。

タマネギの皮を一枚一枚むくように、別れた女房のこと、とりあげられた子供達に会いたくって男泣きした夜のこと、クビになった新聞社でのイラストの仕事のこと、幼年時代からの様々な出来事、両親や友人、学んできた学問、哲学、——そういった自分にまつわるすべての要素が少しずつ剥がれ落ちていきました。

とうとう最後の最後までなくなりかけた時の、その時の気分はどんなだったか、みなさんにはお分かりでしょうか！」

両手の掌を机に叩きつけ、がっくりと頭を垂れた。真剣さを装うコメディアンのような絶望の表情である。本人も意識しているらしい……。

「けっ」

とさっきの男。「アア、自分ハコレカラモ続イテイク人類ノ歴史ニ爪痕ヒトツ残スコトモナク死ンデイカナケレバナライノダ。だつたっけかあ？ けっ」

「その通り！」

関根が男を指差した。

「あれ以上の絶対的な絶望を未だかつて味わったことはありません。幸いにも医学の力で生き返ることができました。先日、雷電の海岸線をワゴンで走っておりますと二本の松の巨木が……」

「誰にも分かってもらえないから、それを素材にして絵を描いているんだっただけなア？」

と私。更に語りに入ろうとする関根の話の腰を折るように、「ところで」

全員がこちらに視線を向けた。

失笑と関根の幾分怒っている表情を無視しつつ、

「東海林、……シヨンジが出席してないようだが、誰か知らないか」
シヨンジとは、計八回の精神科への入退院を繰り返し、今は自分と同じアパートの別室で暮らしている三十七歳の男である。

『面倒みてやってくれや』

という関根からの依頼でしぶしぶ引き受けた。

自分の役目はシアナマイドという断酒のための薬を毎朝、強制的に飲ませることと、福祉の金を管理することだった。大金を持たせると何日も行方不明となり、カプセルホテルなどで飲み続けるからである。

「薬は飲ましたんか」

心配する関根に、

「飲ましてない。昨日の朝、飲ます前に二階の窓から逃げた。金は持ってた筈だから大丈夫とは思う」

「悪いけど心あたりんとこ探して来てくれんべか」

「やばいか。やっぱし……」

「あいつはやベエ……、おれと同じで心臓もいかれてるべし」うんうんと頷いて「マチオ。おれは嫌な予感がしてきたぞオ」

それでは次に新入会の山口さん、と司会者話しはじめたところで私は席を立った。

駐車場まであるいていく。車にキーを差し込み発進させる。ひとり車を運転していると、色々なことを考えてしまう自分を知っている。

今日という日もまた！

胸は常に痛む……

非現実感

物心ついてから、不思議な非現実感にさいなまれてきた。

街は時折、眼底の暗闇に感応し、黒い垂れ幕にくるくると映し出される。映し出された風景は回転するのに現実の街並は確実にそこで固定し流動している。

全てはあまりにもリアルであるゆえに、とても現実の出来事とは感ぜられなかった。

垂れ幕の隙間がちらちら揺れている。その奥にあるものは時折すがたを見せる。わずかに捉えがたく……。

対向車がヘッドライトをバッシングした。農道に左折した所でライトをつけた。周囲に広がる純白の田圃から、ここではまだ冬が終わっていないことを知る。

農道が山道に変わった。

冬枯れた木々の間に北キツネの目が光る。金色の眼光を持つケダモノは凍りついた姿勢でしばらくこちらを観察し、闇の中に反転して消えた。

ルームミラーに遠方の住宅街の光がポツリポツリと映りはじめ、山道も中腹にさしかかっていることを知る。

札幌市の西区から中央区への分岐点。山の頂上よりやや手前に、お化けトンネルと称される古いトンネルがある。乗用車一台がやっと

通り抜けできる程の幅だが、前方の出口は遙かに遠い。そこは近づくにつれ、市内中心部の全景を映し出す丸いスクリーンとなる。

百年と少し前、石狩の原野に出現したこの札幌という都市。

巨大な原始林が消えるにつれ都市は大きくなり、光を発しはじめた。百年後の今、街はあらゆる種類の光につつまれ、冷たい大気の底で青白く燃えている。

いつか関根が言った言葉を思い出す。

『おれたちの色は青よ。青色が群れになって燃えている。だから群青。そういう絵を描く』

自分はなぜあんな傲慢な男のために働くのだろう。命令されるままに。

結論が出ないまま、とりどりの灯りが交錯する光の坩堝るじぼへと入っていく……。

ススキノにほど近い新通り市場のアパート街に自分とシヨンジのクラス木造二階建はあった。『コーポ・やわらぎ』。何がやわらぎか。自分には和らいだ覚えがなかった。

「シヨンジ、帰ってるようだべか」

「見かけてないねエ……」

裸電球の真下に立つ八百屋のオツカサンが私を確認でもするように、明かりに手をかざして目を細めた。

バラリ、商品の上を太い影が何本かかすめた。

「またこれかい？」飲む仕草で笑う。

「あの馬鹿、シラフなら大人しい癖しやがってよオ、飲んじまうと怖いもんなしだからな。参ってんだア……」

八百屋と揚げ物屋の通路に歩み入る。揚げ物屋の裏のアパートが『やわらぎ』だ。高層アパートに囲まれ、ひっそりと和らいでいる。

一階の手前に私の仕事場兼用の住まいがある。事務代行と看板をあげたすぐ上の六畳一間にシヨンジは住んでいた。鉄の階段を駆け登る。電気はついていない。合い鍵を差し込む。鍵はかかっていたいなかった。

ドアが開いた。電気をつける。小便くさいにおいが鼻をつき、反吐が出そうになる。飲む度に布団の中で寝小便をする。けして自分から洗おうとしない。

スーパーの弁当やカップラーメンのいくつかにはタバコの吸い殻がペドロのように盛りあがって浸っている。それらがつまらない雑誌類や茶碗などとひとつになり、床があったく見えない。

テレビの上に立てかけてある別れた妻子との写真。十年以上前のものだろう。今のシヨンジより肉づきが良く、精悍で生活力のある男に見受けられる。四歳位の女の子が長身の若者に抱かれて笑っている。

写真の横に封の切られた手紙があった。便箋を抜き取る。

——お手紙拝見させて頂きました。もう自分の娘とは思わないで下さい。あの夜のことを覚えていますか。あなたは朝からずっと酔っ払っていました。お母さんを正座させ、出刃包丁の先でお母さんの身体中つつきました。動いたら殺すぞ、と面白がつて。セーターから抜かれる度に、包丁の先端に血液がポツリと見えました。それから二人を雪の中に放り出したのです。

「ヨツちゃん死のう」

ぐうつという呻き声が喉から鳴ってお母さんは気絶しました。私達は隣のおじさんに助けられ、あなたはアルコール中毒で精神病院に入れられました。今は二人して、小樽の食品工場で働いています。夜間高校で勉強中です。二度と再び姿を見せないで下さい。お酒、もう飲まないでネ……。芳江——。

四日前の日付になっている。届いたのは行方をくります前日だろうか。

半開きになったままの窓から冷気が流れ込んでくる。窓を閉め、ブルゾンのチャックをあげた。窓外の電柱に飛び移り、シヨンジは逃げたのである。

昨日の朝、窓を見あげて呟いたのと同じ言葉が口をついて出た。

「人間わざじゃねえなア」と。

ゴミを蹴り上げ自分が靴を履いたままだったと気づく。茶碗の割れる男がした。

『面倒みてやってくれや』

関根の言葉が回想された。

「ジジイ、いい勘してやがる」

シヨンジの性格と手紙の内容を思い合わせ、関根の『嫌な予感』が当たりそうな気配に当惑した。一度、自宅に戻ることにした。

入室するなり留守番電話のボタンを押した。関根の声でメッセージが録音されていた。

——シヨンジらしい男をススキノで見かけたっていう会員がいる。ヒトシ……中村仁史だ。やつ、会合に遅れてきやがって「居酒屋で飲んできました」だってよ。まあ誰も責めないがな。シヨンジ、駅前通りの南七条あたりを北にむかって歩いていたそうだ。そうとう赤い顔してうるついていたらしい。ヒトシ、怯えてた。裏があるかもしれない。ひとつ、頼むわ——。

『午後六時二十一分』と機械音。

部屋の時計は六時三十分を回っている。

夕食後と記入された精神安定剤を三袋破り、水道の蛇口に直接口をつけ、喉に無理やり流し込んだ。

怒りが込みあげる。両目の裏が痛みはじめ、腹の中から胸の内側にかけて、軽い痙攣がおこる。息がどうにも苦しくなり、心臓がばくつく。

八百屋の角で立ち止まる。胸に手を当てて呼吸を整える。

手作りまんじゅう、と書かれた熾のほろが前方で風にはためいている。同じ場所から大量の水蒸気が路外に溢れ、風にかき消される。近づいていくと、蒸籠せいろうの積み重ねられた隙間から蒸気は噴き出していた。

爆音が虚をついて耳に響く。

振り返り上空に目をやれば、ビルの裏側から現れたヘリコプターが様々な光を点滅させて低空をゆっくりとこちらに移動してくる。ヘリコプターの視点になってみる。乱立するビルに囲まれ、忘れ去られた商店街は光の中で一本の暗い溝となってちらついている。

肉屋や魚屋は軒を連ね、ラーメン屋のガラス戸のむこうでは老婆が顎を突き出し、両手でドンブリをかかえ、唇をとがらせ最後の汁を飲み込もうとしている。

一切の生活は暗い一本の溝の中の出来事でしかなく、自分も溝の中を漂っている一人の男にすぎない。そう思うと多少楽になる。

ふと、風の流れと逆方向に黒い袋が吹かれて走った。路地に消えた袋が実は黒猫だったことで、精神安定剤が急速に効きはじめていることが分かる。

ススキノへと歩を踏み出した。

発色する街

塵埃が風に吹きあげられ、乾いた路上のいたるところでチラシなどとともに踊っている。汚れた路面に長すぎた冬の余波が感ぜられる。月はじめの土曜日とあって、歩道は人々で溢れている。酒と香水の混じったにおいが時々鼻をかすめる。

回転ずしの看板の下で途方に暮れる男が一人、マジックミラーの中に映っている。

長身で両サイドを刈りあげた頭髮、黒のブルゾン。ジーンズはブーツカットで、靴は勿論アメリカンブーツ。ミラーに映し出された青年はどこにでもいる若づくりの三十代前半。周囲の人々との間に半オクターブのずれを自覚し、本当は興味もない『おしゃれ』で外観を武装している。

『流行なんて関係ないネ。このスタイルが自分の主義なんだ』

と言う程に自分の年齢と流行をきっちり計算し、街の中での自分を演出している。この男が断酒会の会員であり、しかも神経症患者であることを道行く人々は誰も知らない。

アルコール依存症の根底に神経症が存在していることは確かに発見した。そしてこの不安のカタマリの起源も、内観によりおおよその見当はついた。見当はついた。

内観室での二日目、若い頃の母が鮮明に蘇った。台所仕事しながら、帰宅した小学生に微笑みかける姿が心に沁みた。家庭を省みない、

やはり大酒飲みだった父から逃れるように母子の絆は深まった。心が母親の不安や疲れとともにはぐくまれていった……。

日常はアリコールの不安に溺れる家族のあやういダンスのようなものだった。綱渡りのロープの上で人格は形作られ大人になった。地上に降りても地面が揺れる。酒を飲めば一時ゆれはなくなる。

酒は天の美祿。

なるほど、節度をもって楽しむ人々にとって、酒は確かに天からの賜りものといえるだろう。しかし逃避の手段にしてしまう人々にとっては――。

酒は肉体を破壊し精神を蝕む。シアナマイドを服用した後、酒を飲むと全くの下戸が多量の飲酒をした時と同じほどに死ぬ思いをする。断酒してみても断酒会の誰もが根底に神経症や躁鬱や何らかの精神的外傷の存在に気がつく。

はたして遺伝や生活環境だけが原因だったろうか？

鏡の中の男は首をかしげる。

不安や恐怖心を自ら好んで招き寄せてきたような気がする。家庭環境云々も、何かもつと大きな溝を埋めるための材料として、精神の奥底に巣くう何者かが選んだ手段にすぎなかったのではないか？

男は目を閉じる。

黒い垂れ幕の隙間の揺れに意識を集中する。流動物が巨大な流れと

なって、ドロドロと移動するイメージが、かすかにだがみて取れた。
流動物は自ら発光していた……。

波乱

シヨンジが飲^ゃつていそうな人目につかない地下のトイレや、ビルとビルの間隙などは既に探しつくしていた。二時間以上も歩き回り、安定剤の酔いも手伝い、疲れはてていた。シヨンジが店で飲^ゃっている可能性は低かった。金の問題と、それ以上にシヨンジという男はどここの店でも入店を拒否される程、見るからに病んでいたのである。冷たい滴が頬を伝い、雪が降りはじめていたことに気づく。

上空からの雪はビル群に近づくにつれて現実味を帯び、斜めに吹かれ、乾いたアスファルトに打たれて消えた。アスファルトは徐々に湿り気を増しながら、ネオンやヘッドライトを映し出すばんやりとした黒い鏡となる。

どこか喫茶店で熱いコーヒーでも、と思いたち、雑踏をかき分け、ブルゾンの襟を立てた。

頭の芯が朦朧として足取りがおぼつかない。今日一日で医師から割り当てられた三日分もの安定剤を飲んでしまっている。意識の覚醒を促すように上空を見上げ目をつぶる。刺すような雪が顔面をいたぶる。水滴が首に流れても淀んだ思考は目覚めてくれない。諦めて目をあけると――。

ぼうつと霞んだ遠方の低いビルの屋上に、まめ粒ほどの人影が見える。鉄柵に凭れかかった後ろ姿が、隣の高いビルね屋上の電飾板に透らされ、おぼろげに判別できた。瞼の水滴に滲んで消えて、また現れた。シヨンジかもしれないなかった。

歩を速め交差点を斜めに渡ってビルに近づいた。ビルの横側に据え付けられた非常階段。南京錠のかけてある入り口を乗り越え、五、六階のビルを駆け登った。

息を殺し、足音を盗んで人影に近づいていく。

鉄柵を背もたれとし、両足を投げ出して焼酎の一升瓶をかかえる真っ赤な顔の男。働いてもいない癖にドカジャンと作業ズボンで暮らす男。やせているのにむくんだ身体。のび放題の縮れ毛と肩が白く染まっていた。

「シヨンジ」

小さく声をかけた。

なるべく刺激せぬよう「ずいぶん粹な所で飲ってるじゃあねえか。仲間に入れるよ」

ティツと歯と歯の間から唾を吐き捨て、

「マチオのボンスがやつときた」

あらかじめ来るのを知っていたような口調である。

唇の左端を歪めて笑い、凶暴に濁った視線を私に送り、「てめエの薬にはうんざりしているんだ」

話しながら、ひきつり歪む唇の周辺はシラフの時この男の極端な卑屈さを象徴し、酔えば人を怖気おそけだたせる凄味に変わる。

「おれも飲んでいた。シアナマイド」

「てめエに何が分かる。大学出のボンボンが！ テメエが大学で遊んでる年頃にゃあ、若い職人十人もかかえ所帯もってたんだ。娘もいたべしよオ！」

「そんな立派な大将が、なアして今はアル中なのよ？」

「ひでえ酒飲みのおジキがいてな、へっ、そいつが川で溺れて死に
じまった。おジキに憑いていた大酒飲みのへビが、替わりにおれに
憑いたのよ」

街を見おろし、

「近頃ポリがうるさくて、こんな所でしか飲めねエ……」

ティツとまた唾を吐き出した。

「馬鹿どもが歩いてやがる」

吹雪きはじめた大気を透かし、さっきまであれほど現実味を帯びて
いた人々の群れが、墓場にむかう亡霊のように薄らいで進んでいく。
この世ならぬ幻の世界に向かう無限の光に彩られた通路。どこまで
も遠く、北の方向にのびていく。人々を乗せて……。

シヨンジの横で鉄柵に手をかけ、

「手紙、読んだぞ。娘からのやつ」

言ってしまったから後悔した。

「なにッ！」

ドカジャンの腹をたくしあげ、ズボンの中から出刃包丁を取り出し
た。

口許は笑っていない。頬だけ引きつる。

二、三步あとずさりし、立ちあがったシヨンジに向かって両手をあげた。

「おれが悪かった。包丁はどこで手にいれた？」

「へへ、ヒトシと道で会ってな。財布ごとカツアゲよ。こいつでめエもぶっ殺す！」

更に両手をあげつつ、

「おれは丸腰だぜ。丸腰の男を刺すのかお前は。そんな根性なしか」

包丁が落ちる金属音とともに、顔面が熱くなった。安定剤で感覚まで麻痺し、ああ殴られたんだなあ、としか思えない。

触れると鼻血が吹き出し、前歯が一本おれているのが分かる。平然と指を入れ、口腔から赤いかけらをシヨンジの足元に放る。

「これでいいだろう」

逆に怯えたシヨンジは再び包丁を拾い上げた。ポケットから鎮痛剤の空き箱がころがり落ちる。酒と鎮痛剤を併用していたことに気づく。

出刃包丁の先端をドカジャンの上からプスプスと自分の身体に何度も刺して、

「馬鹿野郎！ これくらいなんだってんだよオ！ おれはもつと痛えんだよオ！」

シヨンジの手から包丁を叩き落とした。はずみでこちらの手の甲も切れた。その隙にシヨンジは胸の高さの鉄柵によじ登り、両手を広げおぼつかぬ歩調で歩きはじめた。

「馬鹿よせ。死ぬぞ」

「ヨツちゃん死のう、てかア？ 父ちゃんも死ぬかア」

言った途端、柵から外側に滑り落ちた。

「あああああ！」鉄柵の根元につかまり甲高く悲鳴をあげてぶらさがる。

吹雪がいつそう激しくなる。

鉄柵を乗り越え杵と縁^{へり}のわずかな隙間にしゃがんで、左手で杵をつかみ右手でシヨンジの手首を握りしめた。

ネオンに青白く染まった吹雪の下に人だかりができつつある。渾身の力で引きあげる自分と、自力で這いあがろうとするシヨンジ。足をバタバタさせながら何とか助かった身体を柵の内側に放り投げ、後に続いた。

呆然と尻餅をついている彼に、

「警察が来る。いくぞ」

シヨンジの手をとり非常階段を踏み外しながら駆けおりた。心配顔の人だかりを無視してしばらく走った。街の光がグルグル回った。風俗店の並んだ通りでシヨンジが転んだ。ネオンを反射する水飴色のぬかるみに両手について、全身から絞りあげるような呻き声を発

した。死にてえよオ。死ぬ根性もねえ癖にガタガタ言うな。死ねねえけど死にてえよオ。だったら死ぬこのアル中！

きつい言葉と裏腹に、無意識に後ろからシヨンジを強く抱きしめている自分に驚いた。実体のない本来の自分が先に抱きしめ、肉体が後に続いたふうだった。正面のガラスに映ったシヨンジの顔がシラフに戻り真剣だった。

客引きや呼び込みがぞろぞろと集まってきた。

「泥まみれだよ」

と日本手拭いを差し出され、我に帰った。

吹雪はやんでいた。

アル中の天使

翌日。

「歯欠けコンビだな」

と関根は笑った。

「これでマチオも一人前だ」なあおい、と奥の和室で談笑する男達を見やる。

「シヨンジにやられたんだべ」

そう一人が言えば、

「オヤジには負ける」

別の男が舌を出して首を竦めた。

円山から盤溪に抜ける一本道の道路ぞいに関根の仕事場兼用の自宅はあった。看板屋の彼は常時居候を数人かかえ、仕事を手伝わせたり出面取りの現場などに送り迎えしていた。

「それで、傷の方はどうだった」

「なあんも。ドカジャンとセーターのおかげで助かった。消毒して絆創膏はつといた。おれも病院いくほどでなかった」

包帯の手を叩いてみせた。

壁一面の書棚を背にしてひげを撫でる関根に以前から気になってい

ることを尋ねた。

「ところであんた、ほんとうのとこ、何歳なんだ？」

「おれかい？」

と気軽に笑い「いくつに見える？」

「そうだな。六十……」

「四十七よ」

やはりそうだった。何本か折れているなりに前歯の根元は生え揃っていた。関根のこれまでの来し方を思い、やりきれない心持ちとなり俯いた。

「なあマチオ」茶を勧めつつ、「実は医者からそろそろやばいって言われてる」胸に手を当て、「こいつとは騙し騙しつきあってきたんだが」

「……」

「気にすんな。死ぬことなんか怖かねえんだ。あれから十年、これでも他人のため、一生懸命に生きてきたつもりだ。あの絶望はもう来ねえ」

私は控え目に、

「今度は幸福に死ねる訳だ」

「それがな」額を中指でつつき、「今度もまた絶望してえんだ」指をひげに戻す。

「というと？」

「前は何もできなかった自分に絶望した。今度はこの十年以上、他人のために生きてきたがゆえに絶望したい。マチオ……この二つには大きな違いがあるんだぞオ」

目をつぶり腕を組んだ。

「今でもな。こうして目をつぶるとあの時の空間がうかんで来るんだ。こうやって生活している自分は実は仮のもんで、本当は生まれる前から、あそこを漂い続けて来たような来がする。今だっておれはここにや生きていねえ。ずっとあそこを流れてる」

「あんだ熱でもあるのか」

関根は手を振り、

「マチオ、本当はお前やシヨンジだって、ずっと流れてきたんだぞオ……」

死を間近に控えた男の錯乱。私はそのようにしか受け取れなかった。相手の一見冷静な瞳の中に狂気の色を発見しようと試みた。それは徒労に終わった。

「狂ってると思ってるんだべ」

と言った後、

「流れの中で、お前とシヨンジも出会おうべくして出会ったんだ。世の中に無駄な奴など一人もいねえ。あれだけダメな男でも、逆にお前を目覚めさせた。シヨンジはお前を助けるためにマチオの前に姿を現した天使よ。そう思え」

「思えねえなア……」

アル中の天使！

シヨンジのドカジャン姿の背中から翼が生えている姿を想像し、苦笑した。

群青

春になった。

シヨンジを連れて、小樽の食品工事に通い続けてきた。今日もとうとう前妻と会うことすら許されなかった。世の中には取り返しのつかぬことがある。その事実を胸に受けとめざるを得なかった。

食品工事の建物の裏を流れる小川の土手に、今日もシヨンジは、うずくまっていた。彼を車に乗せ、札幌へと向かった。

「また来よう」

「したら、会ってくれるべなア……」

「どうだべなア……」

家族の前途がどうなるか、私にはこたえようがない問題だった。できることをするしかない。できることを……。

関根が死んだ報せを受けたのは、その午後のことである。帰宅して休んでいると、居候の一人が電話をかけてきた。

——ゆうべ、みんなでテレビ観てたら、突然苦しみだしてな。二ト口も効かなかった。遺体は自宅だ。他の奴も集まってている——。

シヨンジを連れて関根の家に車を走らせた。

途中、関根が最後に語った言葉を考え続けていた。

なさざるゆえの絶望と、なしたがゆえの絶望。誰もが関根のいう空間を今も漂っている。世の中に無駄な人間は一人もおらず、出会うべくして出会っている。シヨンジを天使と思え……。訳がわからなくなる。ギアを切り換えアクセルを踏み込めだ。

快晴であつた。

遠くが霞むほどの大量の植物の種子が、一本道を横切り、森から森へとゆるやかに流れていく。フロントガラスに迫ってきては、ふわりと舞いあがり、けっして車体と触れ合わない。

「今頃めずらしいな。いったい何の種だべ」

シヨンジが不思議がつている。

関根の家は駆けつけてきた人々で、ごったがえしていた。

和室にあがり周囲に礼をした後、正座して死に顔から白い布をそつと下ろした。絶望とは裏腹の安らぎに満ちた顔であつた。

絶望したいと言っていたのに、関根は内心不本意だったのではないだろうか。

そんなふうに考えながら、泣きすぎるシヨンジを冷然と眺めていた。

仏壇はなかった。その代わりのように、枕側の壁に百号はあろうかと思われる油彩画が飾られていた。すぐ下に『群青』と書かれた画用紙が貼られている。

私の目は釘付けになった。

見つめたまま立ちあがり、見つめたまま死人の足側に移動した。つまりさきそうになったが、「危ねえだろ」と言う男の視線すら、既に気にならなくなっていた。

空と水平線が渾然一体となった夜の海である。白に縁取られた暗黒が画面右上から左下に移るにつれ、しだいに濃い青へ、そして薄ら青い色へと変化していく。

人間の頭ほどの大きさの光の渦が、画面なかばの部分にジグザグに並んでいる。黄や緑、灰色や赤……。

様々な渦から発せられた光は煙のように漂い交錯しつつ流れ、狂ったような光線となり海に降り注ぐ。白く波打つ海面は左下の崖に近づくほど大きくうねり、怒涛となって打ち寄せる。

崖の縁ぎりぎりの所で、全体に比べあまりにも卑小な二本の松が、青く突き刺さる吹雪から互いを守るように身をよじらせ、幹や枝をからみちかせながらも、確かに根をはり、佇立していた。

『おれたちの色は青よ。青色が群れになって燃えている。だから群青』

青く燃えているのは人間だけではなかったのか。関根の言う空間も燃えているなら、例え死後があつたとしても、我々に安息の時はないことになる。それなのに、あえて再び絶望したいと言った関根という男はいったい……。

私は息を呑んだ。

泣きすぎるシヨンジに揺られて、関根の表情が徐々に変わってきたのである。

僅かな笑みをたたえた口許や目尻があがり、顔全体がぎゅうつと絞りあげられ、かすかに眉間の皺が濃くなった。たった一、二分の間に関根の死顔は絶望へと豹変した。

シヨンジが驚き後ろにのけぞった。

和室の異変が伝わり、居間から男達が入ってきた。

私は瞑目した。

人々の声が消え、絵の中に迷い込み、私も空間を漂っていた。

光と音だけになる。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6719q/>

群青 作・松尾大生 札幌市民芸術祭大賞受賞作品

2011年2月13日18時29分発行